

「洪く、恥じる、揺らぐ」

湯ノ浦 ユウ

都内にある、どこにでもありそうなアパートの一室。

私はそんなありふれた空間で墮落したように生きていた。

緩く怠惰した生活は嫌いじゃない。寧ろ心地は良い。だけど何もしないで生活が成り立つなんて誰かが私の分まで頑張ってくれてくれることだろう。

こんな理不尽なことを易々と考える大人にだけはなりたくないな
んて思っていたのはいつだっけ……。どんどん忘れる。汚れてく。
もう何でもいいや。全然良くなんかないのに。

東京に出てきて、もう三年くらい経つけど私は何か変わったのだ
ろうか。それとも世の中が変わったのだろうか。

そんなことも、もうどうでもいいか――。

確約のない将来に絶望して、軽い気持ちで仕事を始めた私は、そ

んな私と大人の両方に絶望を覚えた。大人になるってなんだ。出世か結婚か。何かを失って得ることか。汚くなるとかじゃなくて、忘れるとか消えるとかのほうがしつくりくる。思い描いたものはなくなって、冷静だけが私を大きく支配していくんだ。

地元にはもつと違ふ未来を想像してたんだ、なんて甘えるようなことは言うつもりもない。

私が自分で選んだ。

全部、全部、私なんだ。

そこには私しかない。

他の人はいちゃいけないんだよ。

大人になりたくて、一人の時間が好きで、東京に憧れて、自分のやりたいことがやりたくて。これが後何年言っていられるかなんて検討もつかなかったけど、恐らくパタリとなくなるんだらう。

もういいか。

まあいいか。

どうでもいい。

キラキラ見えたものはどんどん濁って見えてくる。そうはなりたくないのに。

どんなにやりたいことがやりたくても、もちろん我慢は必要だよ。本気なら最善を尽くしたり、反対する人に誠意見せたり、目標に向かって努力したり、迷惑だけはかけないようにしたりさ。

でも、やりたいことでもやりたくなくなる時もある。その時に私って最低だなって思う。誰かに「そんなもんか」って笑い飛ばされなくなる。

でもさ、憧れるだけじゃ、いつまでもやりたいことにすがつてるだけじゃ駄目なんだよね。それじゃ結局本気でやってる本物の奴にすぐ置いて行かれる。好きなものとやれることは違う。そういうことなら、できることを私なりに頑張ろうと思うんだ。

いつまでもこのままじゃいられないだろうしさ——。

部屋が夜の空気に晒されて、湿っているうえに肌寒い。窓を閉めればいいのだろうが動く気はない。天井からは何かぼたぼたと垂れてきている。どうせいつもの雨漏りだろうなんて決めつけをかまし

てみたが、それは想定以上の雨漏りに違いなかった。
流石に不味いと思つたが私はお腹がすいたので、ご飯を作ろうと思
う。

それにしたつて夜は視界が曇つて濁る。目印が微かすぎる。分か
らなくなる。迷う。戸惑つてからも一度迷つた。あぐくの果てに
忘れてなくなる。もうどうなつたかも分からない。全部嘘になる。
嘘を本当にするために目印を頼つて、もう一度這い上がる。もう選
択を間違えないようにしようと、私は考えを改めることにした――。
私は明日も明後日も一カ月後も一年後も十年後も、割り切つた考え
を持つて夢を追いかけてみようと思う。

私はこれからも歌を紡ぎながら生きていく。

『閉じて、閉めて、塞いで、閉じ込めて。何にもなかったように振
る舞つて。ポツリ、ポツリと雨にうたれては。消えかけそうになる
声を何度も拾い上げて。しとしと、しとしと。涙が零れて。赤い空

に涙が混ざって、溶けて、拒絶したような紫色に変わる。冷たい空気が肌に染みて、シンシンと雪が降る♪』

『偽って、笑って、研ぎ澄まされて、転んで、ぶつかって、参って、怯んで、強がって、成長して、粗さがでて、傷つけて、高めあって、疑って、気づいて、悩んで、笑って、裏切られて、思い込んで、信じて、つられて、笑う♪』

『バキュン、バキューン、と言葉の発砲音が飛び交うこの世界で、幾ら銃弾が体を貫いて行ったところで外傷はつかない。でも、痛い、痛い。バキュン、バキューン、と今日も弾が飛び交っている。顔も知らない相手に向かって、無意識に撃ちつけている。見ているだけでも、痛い、痛い♪』

私はそんな歌を、歌い続ける。

歌を歌っていて私にも気付くことはあった。自分がどんな人間か

なんて自分がよく知っている、そんなことは殆どありえないことだった。大概の人は無意識に見ないようにしているか、見えていない自分の存在に気づいていない。そんな自分が存在しているのに自分なんて完全には信用できないのに、人は自分を信用したがる。

不安だからね。

本当はその溝を埋めるために生きて学ばなくちゃいけないのにね。私はもう逃げないよ。
